

4 レタスのハスモンヨトウに対する薬剤の残効

ねらいと成果

淡路地域内における年内取りのレタスは9月から11月にかけてヤガ類の被害が甚大で、減収が著しい。中でもハスモンヨトウは発生時期が長期にわたり、大発生することが多く、問題となる害虫である。そこで、レタス登録薬剤でハスモンヨトウに対する残効について調査したところ、IGR 剤が長い残効を示した。また、クロルフェナピルフロアブルは即効性で4日後まで高い食害防止効果が認められた。この2種の薬剤を組み合わせることで実証試験を行ったところ、無処理に対し全重で125%、球重で140%の収量増となり、防除価も86.4と高く、商品化率も90%（無処理6.7%）とよかった。

内容

試験は淡路農技センター内ほ場で、品種「JT-31」を用い、8月15日に播種、9月5日に定植した。1区6.0㎡の3連制で、残効試験は9月21日に、実証試験は9月21日と10月3日に肩掛け式手動噴霧器で、1区あたり約1.2ℓ（約200ℓ/10a）を散布した。展着剤は加用しなかった。残効試験は散布4日後、散布7日後、散布12日後に各区3葉をアイスクリームカップに採集し、3齢幼虫を10頭放飼し、5～7日後に生死を判別、同時に食害面積率を調査した。なお、死虫率が100%となるまで調査した。供試虫は人工飼料（インセクタ LF）で飼育し、3齢になると15℃の恒温器に移した。実証試験は10月15日に1区10株の全重、球重、L・2L率、商品化率、寄生幼虫数を調査した。

残効試験：IGR 剤の中でクロルフルアズロン乳剤とテフルベンズロン乳剤は散布12日後まで補正死虫率は80%以上を維持し、食害も少なく抑えた。フルフェノクスロン乳剤とクロマフェノジドフロアブルは散布12日後で補正死虫率が急激に低下し、食害量も急増したため、前述の IGR 剤より残効性が劣ると考えられた。IGR 剤以外では、クロルフェナピルフロアブルが即効的で高い効果が認められ、食害も最も少なかった。チオジカルブフロアブル、アセフェート水和剤、ゼンターリ顆粒水和剤はやや残効が認められた。その他の剤では残効が認められな

かった。（表1）。

実証試験：残効の長い IGR 剤と即効性で食害防止効果の高いクロルフェナピルフロアブルの組み合わせを検討した。IGR 剤単用区と混用区は無処理と比較して全重、球重、L・2L率が勝った。また、混用区は商品化率、防除価が最も優れた（表2）。

今後の方針

結球内部に幼虫が食入し、商品価値を大幅に低下させることから、レタスの難防除害虫として知られているオオタバコガに対し、効果の高い薬剤を検討する。

田中 尚智（淡路農技・農業部）

表1 レタスのハスモンヨトウに対する残効試験

薬剤名	補正死虫率（食害程度）		
	4日後	7日後	12日後
ベルトリン ×2000	0%(+++)	—	—
イトエンブ ロックス ×1000	0%(+++)	—	—
アリミル ×1000	0%(+++)	—	—
チオジカルブ ×1000	90%(+++)	0%(+++)	—
アセフェート ×1000	100%(++)	0%(+++)	—
PAP ×1000	0%(+++)	—	—
BT(エスマルク) ×1000	0%(+++)	—	—
BT(ゼンターリ) ×2000	100%(+)	0%(+++)	—
テフルベンズロン ×2000	100%(+)	100%(+)	86%(++)
クロマフェノジド ×2000	90%(++)	50%(++)	0%(+++)
フルフェノクスロン ×4000	100%(+)	100%(+)	14%(+++)
クロルフルアズロン ×2000	100%(+)	100%(+)	100%(++)
クロルフェナピル ×2000	100%(±)	50%(++)	0%(+++)
イマクチン ×2000	0%(+++)	—	—

食害程度：+(0-30), ++(30-60), +++(60-)

表2 レタスのハスモンヨトウに対する実証試験

1回, 2回	全重(g)	球重(g)	L・2L率	商品化率	防除価
CF+TN, CF+CN	847.3	461.8	100%	90.0%	86.4
CF,-	748.8	397.8	63.3%	20.0%	30.4
TN,-	873.8	457.0	96.7%	13.3%	0
CN,-	857.7	438.0	86.7%	33.3%	35.2
無処理	678.3	328.7	36.7%	6.7%	—

CF:クロルフェナピル TN:テフルベンズロン CN:クロルフルアズロン -:無散布